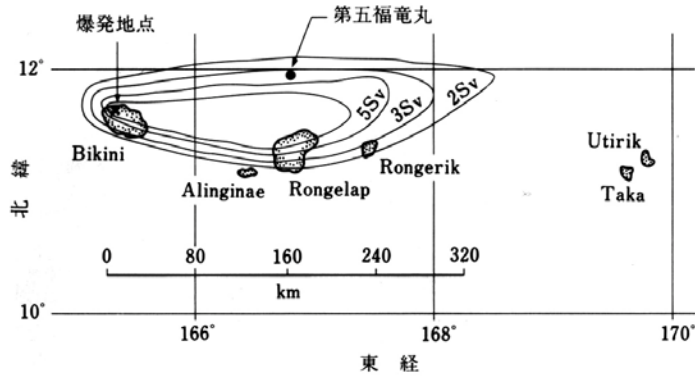
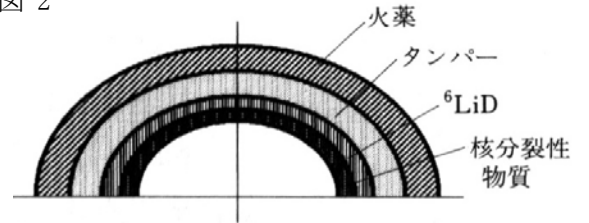


図 1



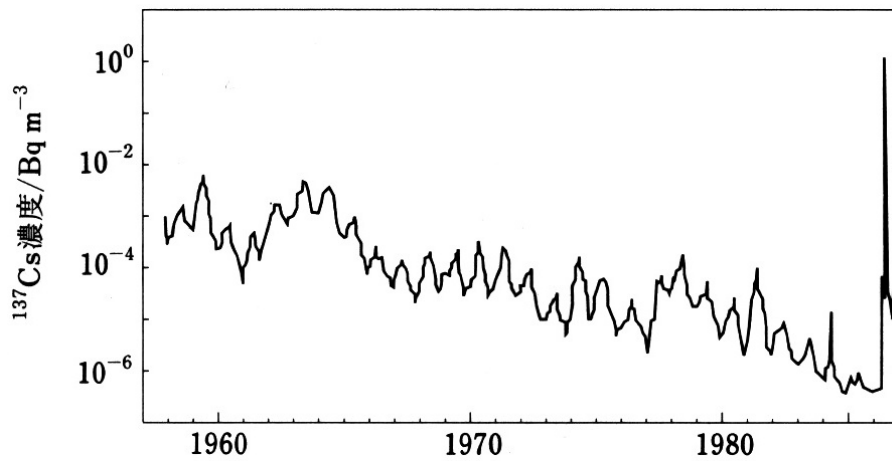
15Mt 水素爆弾の実験の際の放射性降下物の分布 (線量については異なる値も報じられている。M. Eisenbud(1987)による)

図 2



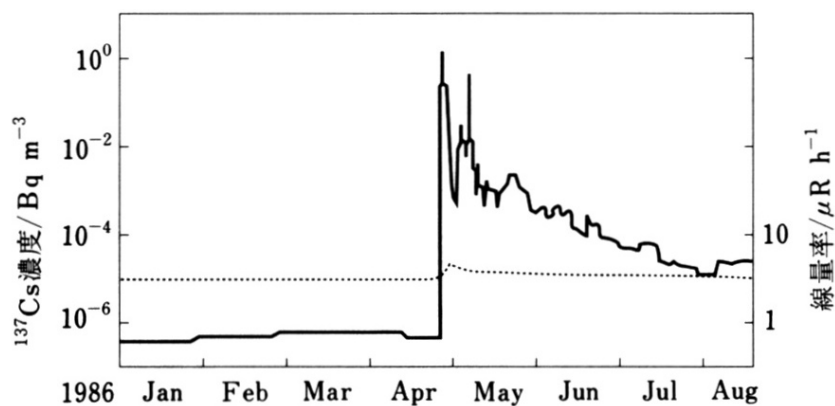
3 F (Fission-Fusion-Fission) 爆弾の構造の概念図 (G. R. Choppin, J. Rydberg(1980)による)

図 3



大気中の ^{137}Cs 濃度の時間変化 (ストックホルム)
 (大気圏内核兵器実験の影響が主で、1986年春の増加は旧ソ連原発事故による放出を示す。I. Vintersved, L. De Geer, B. Bjurrman, R. Arntsing, S. Jakobson, H. Mellander, *IEEE Trans. Nucl. Sci.*, NS-34, 590(1987)による)

図 4

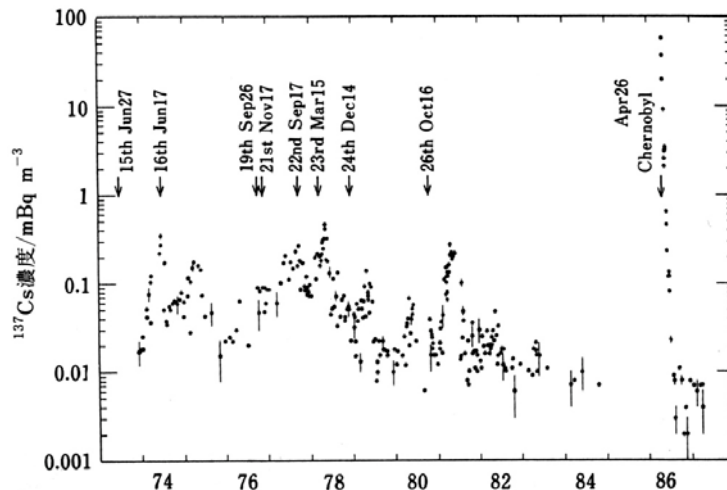


大気中の ^{137}Cs 濃度の時間変化とモニタリングステーションの記録計の読みの時間変化 (I. Vintersved, L. De Geer, B. Bjurrman, R. Arntsing, S. Jakobson, H. Mellander, *IEEE Trans. Nucl. Sci.*, NS-34, 590(1987)の図を修正)

表 1 2011年3月15日、11時14分から1時間、東京都台東区内で採取した大気中の放射能濃度（放射性ヨウ素の値を6倍から7倍した方がいい）

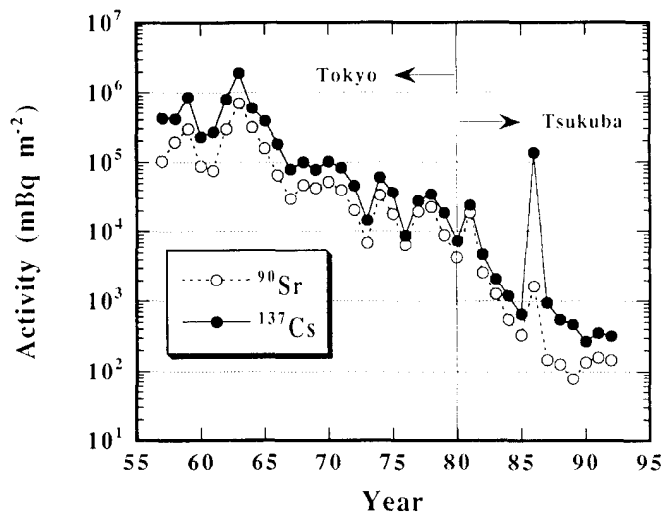
放射性同位体（半減期）	放射能濃度（Bq/m ³ ）
ヨウ素-131（8.04日）	720
テルル-132（3.26日）	570
ヨウ素-132（2.30時間）	450
ヨウ素-133（20.8時間）	20
セシウム-134（2.06年）	110
セシウム-136（13.2日）	21
セシウム-137（30.1年）	130

図 5



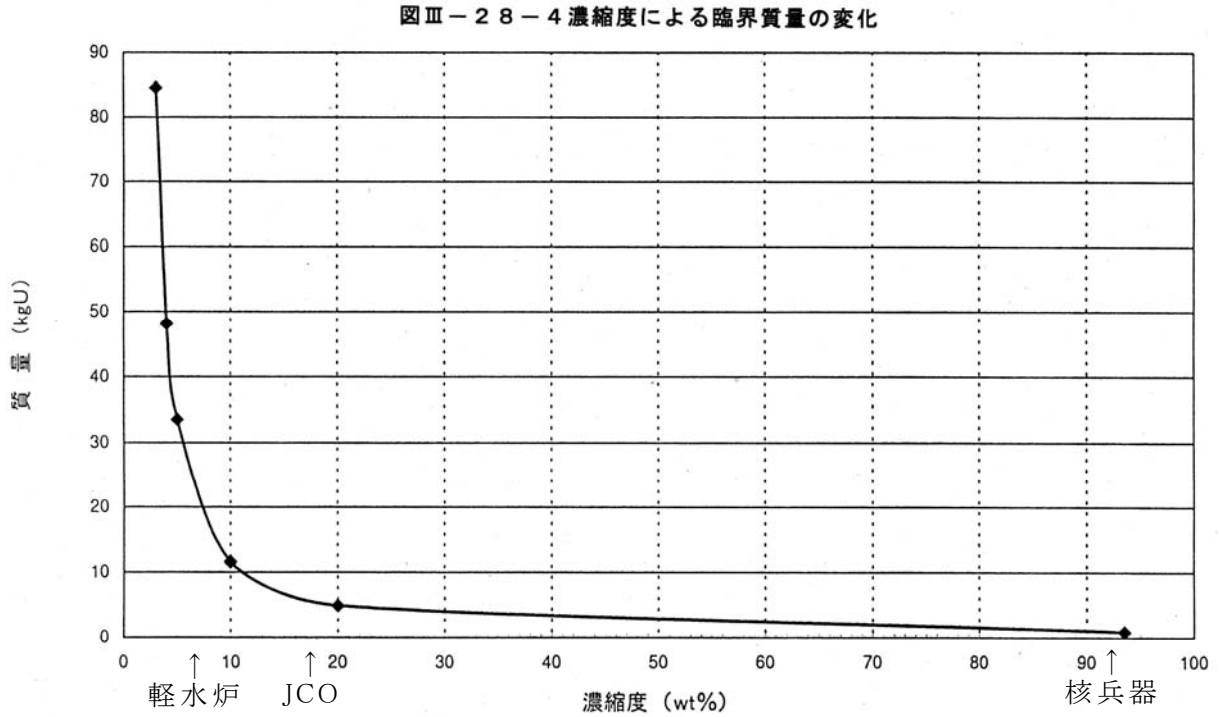
大気中の¹³⁷Cs濃度の時間変化（中国による大気圏内核兵器実験の影響が主で、1986年春の増加は旧ソ連原発事故による放出を示す、名古屋大学における測定値）

図 6
（気象研究所）



Annual radioactivity deposition observed at MRI since 1957 (MRI moved to Tsukuba from Tokyo in 1980).

図 7



出典：臨界安全ハンドブック等（均質 UO_2F_2 -水系）
 注）二重装荷を考慮しない場合の質量制限

参考Ⅲ-29 ロット混合方法（クロスブレンディング）

図 8

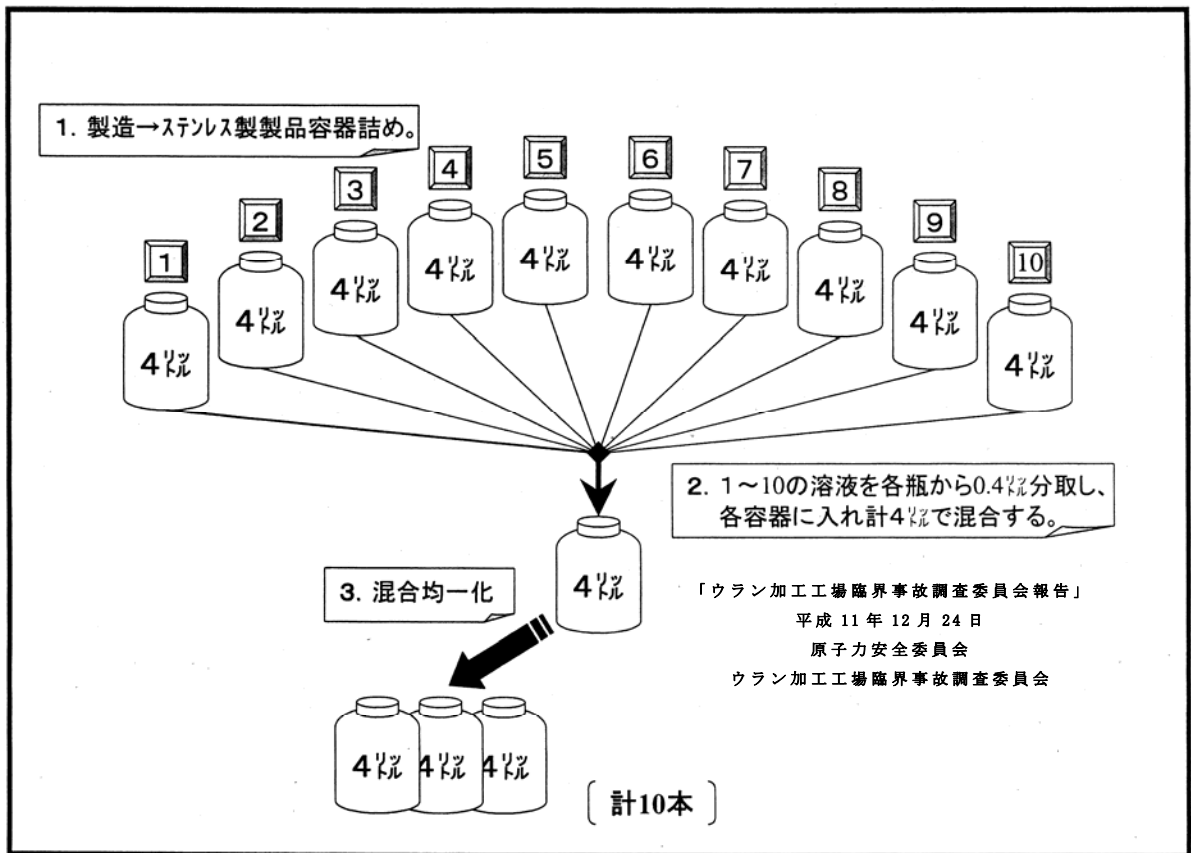
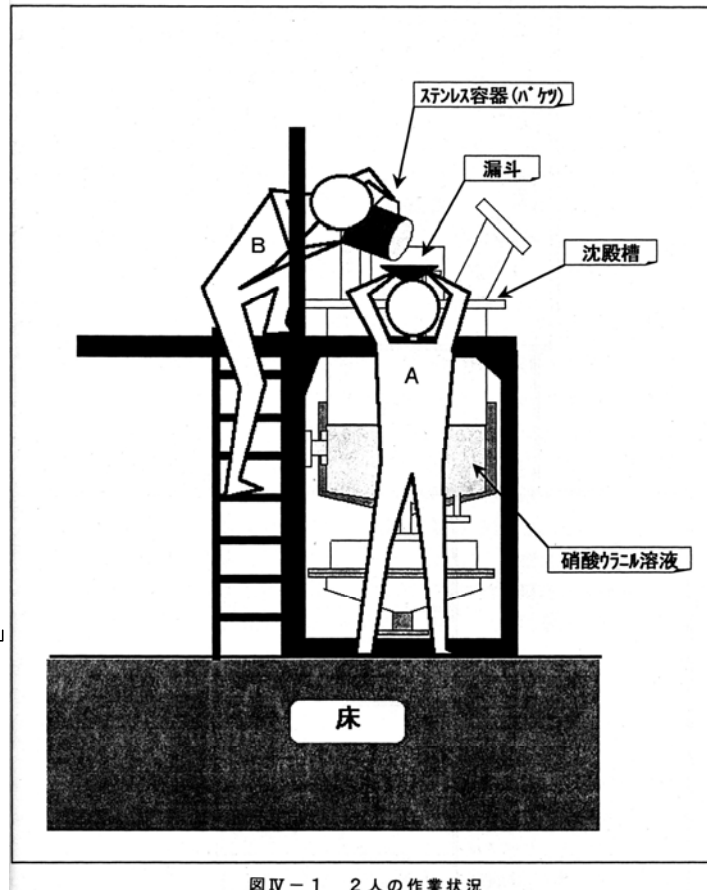


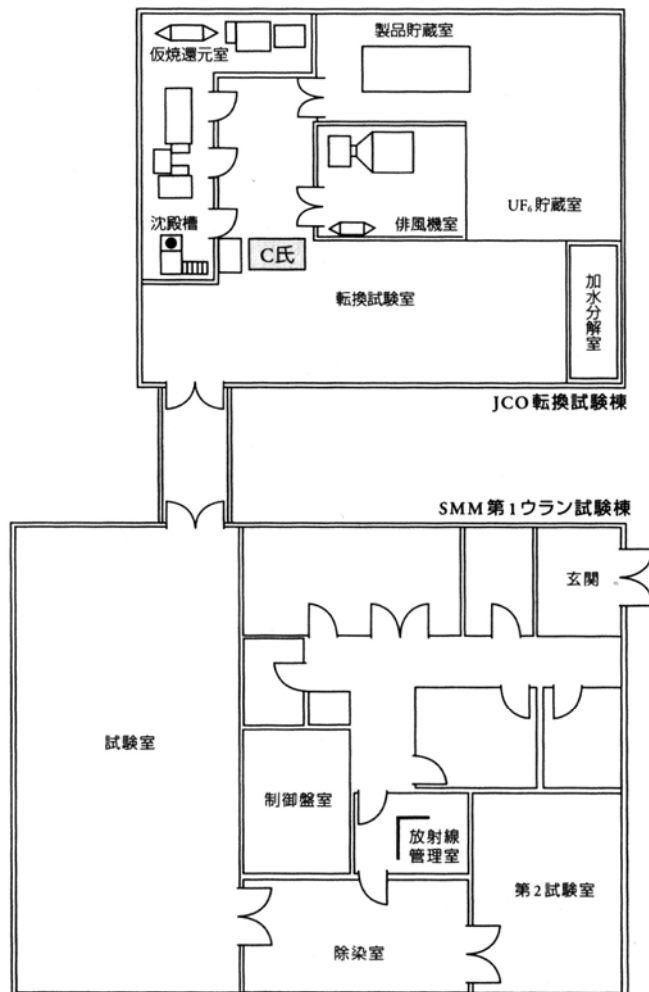
図9



「ウラン加工工場臨界事故調査委員会報告」
平成11年12月24日
原子力安全委員会
ウラン加工工場臨界事故調査委員会

図IV-1 2人の作業状況

図10



作業場所の概況